

◆大内宿における戸数、人口、馬数の変遷

年号（西暦）	戸数	人口	馬数
元禄4年（1691）	66	351	71
享保5年（1720）	76	366	77
ㄥ 18年（1733）	71	350	77
延享元年（1744）	71	345	
ㄥ 3年（1746）	78	404	63
宝暦2年（1752）	71	338	
明和元年（1764）	67	314	
天明3年（1783）	67		
ㄥ 8年（1788）	58	226	26
寛政元年（1789）	50	270	
ㄥ 9年（1797）	50	270	
文化6年（1809）	52		
ㄥ 14年（1817）	50		
文政9年（1826）	50	252	
天保8年（1873）	44		
ㄥ 12年（1841）	39	246	
嘉永2年（1849）	46	274	
安政2年（1855）	48	268	53
明治4年（1871）	46	270	
ㄥ 12年（1879）	52	276	71

する場合は馬三疋までとしている。  
宝暦以後になると、中付は在郷商人を背後に次第に組織化されていく。商人荷は表向き禁止であつても、迅速で積み荷が傷まず安全となれば自然と中付集まった。天保9年（二八一）、大内から糸沢までの六ヶ宿は、一ヶ宿二十貫文ずつ支払うよう要求し、中付はこれを呑んだ。嘉永二年（二八四九）にも、宿駅側は更に口銭拾文の要求を出し、これも中付側は翌年に呑んでいる。この時の宿駅側は五十里宿までの九ヶ宿に及んでいる。  
嘉永五年（二八五二）、中付は驚者備金制度を発足させ、組織に入った馬数は六〇〇頭に及んでいる。中付側は完全に宿駅を圧倒し、宿駅の衰退は甚だしいものとなつた。まして享保年間以後の幕藩は、財政窮乏から年貢の増収を行い、半農藩宿で生活を支えてきた下野街道の各宿駅も中期以降は荷駄量の減少と凶作の頻発から人口も減少して生活は困窮を極め、宿駅として重要な馬数を保持することも困難なあり様となつてくる。

幕末から明治にかけて再び馬数は増加しているが、これは駅馬よりも驚者馬の方が輸送の活発を向かえたためであると考えられる。下野街道の宿駅はこうして幕末を迎えるのであつた。

## 第八節 下野街道の終末

下野街道は、近世末期から明治にかけても多くの人たちが旅し、あるいは駆け抜けた。

一つは、諸国巡検使の通行である。一行二一八人は、天明8年（二七八八）五月十四に会津に入り、十五日大内宿泊、十六日田島宿泊、十七日田島から糸沢宿（昼食）―田島に戻つて泊、十八日田島から伊南郷に抜け、以後奥羽・北海道松前藩・奥州太平洋岸の各藩を巡察して十月十八日江戸へ帰着している。

この巡検使の中に当時地理学者として有名な古川古松軒が随行しており、この記録は後に「東遊雜記」として纏められている。この中には会津城下を始めとして下野街道の道筋村々の様子が書き留められており、城下では「会津候は二十三万石の御大家ながら、城下甚だ侘しく賤しきなり。御城下ながら備前岡山の城下などと見比べれば大いに劣れり。婦人の容体ことにいやし」と述べ、大内宿周辺では「この辺一向山岳のみにて、記すべきことなし」、田島では、「深山はかるべからず。人物・言語も至つて悪しく、海魚さらになく、川魚に赤腹・河鹿などという目慣れぬ魚はあれど、鯉、鮒、鰻などは土人知らず―中略―食事大いに悪しく、毎日山の芋と豆腐の外はなく、味噌・醤油の味わい苦く辛し」と大変な酷評となつている。